

造形遊びの類型化の試みⅡ

岡田匡史

An Essay on Categorizing Zōkeiasobi(Formative Play) Ⅱ

Masashi OKADA

(Received November 29,1991)

キーワード: 造形遊び、アースワークスの活動、エコロジカル・アートの活動、見立てに基づく活動、材料・造形物で遊ぶ活動、パフォーマンス的活動、マルチメディア的活動

本論は、『美術教育学—美術科教育学会誌 第12号(1992)』に掲載を予定している拙論、「造形遊びの類型化の試みⅠ」の後篇である。Ⅰ、Ⅱは基本的に一篇の論文として書かれており、したがって、2つを通してお読みいただきたく思う。造形遊びは、今日、多種多様で活発な活動展開が認められるが、反面、やや無系統で雑然たる観を呈しもする。その造形遊びを、できるだけ解りやすく簡潔に類型化するために、計17種類の項目を設け、Ⅰでは項目11. までを解説した。本論では、項目12. から解説を始めたい。なお、文中に「前述」、「前記」等の表現が出てくるが、これらにはⅠに出てくる記述を指したものががあるので、繁雑ではあるが御確認願いたい。主要参考文献は最後にまとめた。

*

12. アースワークスの活動

point:表題の「アースワークス(Earthworks)」とは、60年代後半に興った芸術動向で、湖、海岸、砂漠、山岳地帯、雪原等、自然のなかで繰り広げられる広大な造形活動全般を総称する美術用語である(アースワークとしてもいいが、ここでは秋山光和他編集『新潮世界美術辞典』[新潮社、1985年]p.24.に倣い、複数形の表記にした)。いろいろな造形的痕跡を残すので、前述した10. の活動の発展型と捉えることもできる。この系譜の作家達の活動に関しては、ロバート・スミッソン(Smithson,Robert)『螺旋状の防波堤(1970)』、マイケル・ハイザー(Heizer,Michael)『9つのネバダのくぼみ(1968)』、前記リチャード・ロングの仕事等参照。造形遊びにおいては、主に大地と関係がある諸活動を捉えるのに、この用語を使用する。

身近なところでは、砂場遊び、水溜まり・泥田に入っの泥んこ遊び等がある。泥ダンゴづくりのような塑造的活動の最初の形態が、こうした砂まみれ・泥まみれの活動のなかから生まれてくる。【小学校学習指導要領(第7節図画工作、第1学年A表現)】p.86. に明記されている、砂・土・粘土等の可塑材は、ここで取り上げる活動の主材料である。材料への塑造的な働きかけも重要だが、材料がふんだんにある場所自体への働きかけも大事である。場所に働きかけるとき、スコップ等で穴・溝を掘る、穴・溝を埋める、地面に指・棒・靴等で線を引く・マークを記す・描画する、地面に小石等を置く・並べる・積む、地面に枝等を突き刺す、地面

を布・落ち葉等で覆う、地面を踏み締めるなどして堅める・均す、砂を何度も盛って山をつくる、山の側面からトンネルを掘る、山の斜面に道・階段等をつくる、最後に山を壊す等々、さまざまな活動が自ずと展開する。夏場、水着姿の子供達が砂浜で友達を砂に埋めて遊ぶ光景が見られるが、この活動は最もポピュラーなアースワークスの活動の1つである。また、雪ダルマ、カマクラ等の雪を使った塑造活動も同領域に属する。最近、新聞・TV報道で話題のミステリー・サークルも、これが人間の悪戯だとすれば、アースワークスの活動の1つである。

参考1. 野外での描画活動の展開。11.の活動の参考2.で紹介した2つの指導実践例参照。

参考2. 砂場遊び。砂場で、水や木の葉、草、枝木、棒、板、石等を用い、また、スコップ、バケツ、ホース、トイ等の用具・補助材も利用して、いろいろな造形活動を展開する。砂場での活動全般が述べられている、古市憲一（お茶の水女子大学附属小学校）著『造形あそび』（グリーン・ブックス、開隆堂、1979年）のIV章「砂場こそ造形遊びの泉(pp.60-71.)」参照。また、福田昭雄編著『造形遊び—その指導と展開』（東書TMシリーズ、東京書籍、1979年）所収の、板良敷敏先生（大阪教育大学附属平野小学校 [昭和54年当時、現在長崎大学]）による2つの指導実践例、「土や砂で遊ぼう—造形園（第1学年）pp.102-103.」、「水を流す—造形園（第2学年）pp.104-105.」、および、『造形美術教育大系2 小学校低学年編』（美術出版社、1982年）で、宮坂元裕先生（筑波大学附属小学校 [昭和57年当時、現在横浜国立大学]）が紹介されている、「すなばあそび(pp.38-41.)」の実践もあわせて参照願いたい。

参考3. 川原、湖岸、海岸での砂を使った塑造活動。今から35年程前に、この種の活動の先駆的实践が、野々目桂三先生（江東区立第一大島小学校 [昭和31年当時]）の指導で行われている（羽仁進監督『絵を描く子どもたち—児童画を理解するために』 [岩波映画製作所、1956年] 収録）。学習指導要領が改訂され、児童の生活経験を重視する方向へと学校教育が動きだし、造形遊びが中学年まで拡張された現時点と、創造美育運動が活発であった昭和30年代当時とを比較してみるのには興味深いことである。

参考4. 冬場可能な雪の造形遊び。雪合戦(15.の活動参照)をしたり、雪ダルマを初め雪の塑像・モニュメント類を製作したりする。また、校庭に積もった雪を真白なキャンヴァスに見立て、そこにいろいろな模様・絵柄を描く活動を展開する。福田編著前掲書には、伊藤善彬先生（札幌市立月寒小学校 [昭和54年当時]）が、「雪で遊ぶ—校庭（第1学年）pp.108-109.」を、また、谷勲先生（札幌市立真駒内緑小学校 [昭和54年当時]）が、「雪玉積み遊び」、「雪玉のトートムポールづくり」等、各種の雪の造形遊びを総括した、「冬の遊び—校庭（第1～6学年）pp.110-113.」を紹介されているので参照願いたい。

13. エコロジカル・アートの活動

point : 表題の「エコロジカル・アート (Ecological Art)」は、ロビン・チェンバレスト (Cembalest, Robin) が、『アートニュース(ARTnews)』誌1991年夏季号 (vol.90 no.6) 掲載の論文 “Ecological Art Explosion” で取り上げた美術動向の名称である。彼は、エコロジー (ecology) を主題とする作家達の活動の、「一般的動向を指す最もポピュラーな名称として登場したものが、エコロジカル・アートである(p.99.)」と述べている。この用語を、本節で扱う諸活動を総括するのに用いる。

エコロジカル・アートの活動は、自然体験を重視し、主に自然のなかで行われる点で、前述

12. の活動と類似する。しかし、この活動は、エコロジカルな観点、すなわち、自然愛護・環境保全という明確な倫理的コンセプトに基づいて展開されることが重要で強調すべき点である。自然と深く交感することをねらいとするさまざまな造形活動を通して、自然体験を豊かにし、美的感性や自然を愛する心情を育て、自然・環境保護に対する基本的態度を養成することが、本活動の骨子である。本節で扱う題材は幅広く多様であり、自然物の観察表現も、題材設定の仕方によってはエコロジカル・アートの活動の1つになりうると考えている。だが、造形遊びの活動領域としては、素朴な手法で自然物を配置構成するインスタレーション的活動や、前述したアースワークスの展開が主流である。この種の活動に関しては、拙論「環境問題と美術教育」（『美育文化』1992年1月号[vol.41 no.1、財団法人美育文化協会]）pp.14-19. 参照。

『第13回美術科教育学会・研究発表概要集』（美術科教育学会、1991年）所収の、「造形遊びの考察」に、環境造形的活動という観点で筆者は次のように書いた。

「そよぐ風・太陽の温かさ・木蔭の涼しさ等を肌で感じ、自然の時間的な微妙な変化に気づきながら、水・砂・土・粘土・石やその他様々な自然物に触れ様々な造形活動を通して、自然美と命ある物達の尊さを学び、奥深くに働く自然界の驚くべき絶妙なバランス、自然の生態系の不思議な在り様を体験・実感する、そうした内容がこの領域の根幹である（p.21.）。」

前掲『アートニュース』誌には、“The Greening of the Art World”と題して、美術からアプローチした環境問題の特集が組まれた。この特集を構成するチェンバレストの前記論文には、生態学者・植物学者等の専門家の意見を聞きながら、栽培・植林によって「物語風の風景」^{ナラティブ・ランドスケープ}をデザインする、アラン・ソnfist(Sonfist,Alan)の活動や、ヨゼフ・ボイス(Beuys,Joseph)による檜の植樹計画等が紹介されている。

深刻な地球規模の環境破壊が問題となっている現在、前述7.のリサイクル的活動とともに、エコロジカル・アートの活動が造形遊びの重点的領域として広く認知されることが緊要である。

参考1. 野原・雑木林・森等に行き、そこで見つけた草花、木の葉、木の実、枝木、小石等、様々な自然物を使って思う存分遊ぶ活動。野外での造形遊びは、遠足、林間・臨海学習等の校外学習のなかで計画するのがよいと思われる。校舎周辺での草花遊びの活動（第1学年）について、石川誠先生（東京学芸大学附属大泉小学校）が解説された、「花の色は移ろいやすく」（『教育美術 [特集] 材料をもとにした造形活動—新・学習指導要領から』1989年9月号 [vol.50 no.9、財団法人教育美術振興会] 所収、p.16.）や、前述した8.の活動の参考1.参照。

同種の考え方は、新設の生活科にも見出すことができる。『小学校学習指導要領（第5節生活、第1学年）』には、造形遊びと重なる次の注目すべき記述がある。「土、砂などで遊んだり、草花や木の実など身近にあるもので遊びに使うものを作ったりして、みんなで遊びを工夫することができるようにする（p.70.）。」

参考2. 参考1.と同じような場所で、拾い集めた材料と、自然の補助材（重しに使える石、支柱・骨組に使える枝木、縛るのに使える草・蔓、落ち葉等を繫げたり地面に刺して固定したりするのに使える棘・松葉等）を使って、自然の形態・性質を直接体験しながら、多様な造形活動を展開する。朝日新聞・日曜版（1991年11月3日）の特集記事「自然発見—愉快な草木遊び（1・2面）」参照。また、板良敷先生は、アリの観点でアリの住居を石、砂、葉、草、枝木、紙等で製作する、エコロジカルな活動展開の可能性を示唆する指導実践例、「虫のおうちをつくろう—校庭（第1学年）」（福田編著前掲書所収、pp.150-151.）を紹介されているので参照願いたい。

この種の活動に関しては、アンディ・ゴールドズワージー(Goldsworthy,Andy)の環境造形的展開

が大いに参考になる。『美術手帖 [特集] 緑のイギリス美術—エコロジーとアートの共生庭園』1990年11月号 (vol.42 no.630、美術出版社) に、彼の表現手法が次のように解説されている。「自然環境の中で見いだした木葉、木枝、石、土、雪、氷などの天然素材を用いて制作を続けてきた彼は、その作品に接着剤などの人工素材はいっさい使いません (p.65.)。』彼の『草の葉を棘で留めたいかだ、シドブル、1989年6月2日』参照。

参考3. 普通の絵画表現であり、造形遊びとは言えないが、エコロジカルな観点をもたせたもの。従来の風景画製作における自然鑑賞の観点を一步押し進めて、エコロジーという意識でもって自然の豊かな恵みに接し、感動を覚えながら景観をスケッチする。このとき児童の心のなかに、自然に対する驚嘆、畏敬の念、謙虚さといった人間的に重要な感情が満ちてくることが望まれる。また、この活動とは対照的に、環境破壊が進む眼前の風景を時代批評眼をもって厳しく見つめスケッチすることも位置づける必要がある。

参考4. 植物栽培を位置づけた生活科の発想に近いが、可能であれば花壇・庭園づくりを計画し、自然と親密に接触する体験を児童に得させる。また、この活動を通じ、自然界と自分達の造形的営みとが調和すべきことに関心をもたせる。後者の趣旨は、『小学校学習指導要領 (第7節図画工作、第5・6学年A表現)』に記されている、デザイン領域の活動、「身近な環境などを造形的に構成(p.91、p.92.)」することに関連し、また、『中学校学習指導要領 (第6節美術、第2・3学年B鑑賞)』に記されている、デザイン・工芸領域の活動、「自然と造形作品との調和に関心を深め、美術の諸活動が環境形成に果たす役割について理解すること (p.74.)」に連なるものである。

参考5. 前述の草花遊びと関連する、押し葉・押し花製作。自然観察および自然美の精緻さの鑑賞がねらいである。この活動に関しては、自然愛護の精神をもち花を愛する、横明美のプレストフラワーアレンジメント参照 (横明美個展『英国コルノビア物語—プレストフラワーアレンジメントで綴る花紀行』が、1991年8月6～11日、ギャラリー・ナカノ [山口市] で開かれた)。

木の葉を使った表現に関しては、前記ゴールズワージーの仕事が興味深い。彼には、『葉脈の間を裂き松葉で縫合した葉 福井県和泉村、1987年12月20日』と題する、題名通りの手法で製作した作品がある。材料は枯れ葉で、葉の縫合には松葉を利用している。彼の独自の取り組み——枯れ葉の形・構造・性質に対する着眼、接合材に松葉を利用するという発想、自然の造形美の発見、自然物だけを使った製作等は、造形遊びの観点から参照に値する。

14. 見立てに基づく活動

point:想像力を働かせ、あるものの外観的特徴から、人間の顔、動植物の姿態、風景等を捉えたり、あるものを別の意味・機能をもつものとして取り扱ったりする働きを、一般に「見立て」と呼ぶ。

レオナルド・ダ・ヴィンチ(da Vinci,Leonard)は、「絵画論」で、壁の汚れに「人の顔を見、いろいろな動物、戦闘、岩石、海洋、雲、森林やそれに類したものを見る*」ことを述べている。また、ミケランジェロ (Buonarroti,Michelangelo)が、大理石の量塊のなかにリアルな彫像を透視できたことは、美術史でよく知られた事例である”。これらの基底に見立ての活動が明らかに認められる。

*ただし、ダ・ヴィンチはこの方法では「鈍い風景」しか描けないとも述べている。レオナルド・ダ・ヴィンチ「絵画論」（裾分一弘『レオナルド・ダ・ヴィンチの「絵画論」攷』所収、中央公論美術出版、1977年)p.153.

**「彫刻とは不要な物を削り取っていく種類のもの」というのが、ミケランジェロの基本的な彫刻観であった。中森義宗「[評伝]ミケランジェロの生涯と芸術」（高田博厚・中森義宗『ミケランジェロ』[世界美術全集3、小学館、1977年]p.98.

遠く遡れば、「ビゾン、鹿、馬、猪などが岩盤の隆起を巧みに利用して現実感豊かに描かれている*」アルタミラ洞窟壁画にも、見立ての働きが顕著である。また、原始美術と関連が深い、描画表現の発達初期、命名期にも、幼児が自らの描画痕跡をなにかの形に捉え、それを名前と呼ぶという、見立ての原理が認められる。原始美術と児童画との関連については、ローダ・ケロッグ著『児童画の発達段階—なぐり描きからピクチュアへ』（深田尚彦訳、黎明書房、1971年）の15章「児童画の国際性（pp.215-233.）」参照。

*前掲秋山他編集『新潮世界美術辞典』p.61.

新しい絵画イメージを追求したシュルレアリスム (surrealisme) の活動において、見立ては重要な表現原理であった。自動筆記法によって偶然できた線の軌跡・集合からあるものを発想すること、フロッタージュ (frottage) によって得られた物体表面の凹凸模様から、多様な絵画イメージを展開すること (マックス・エルnst [Ernst, Max] 『博物誌 [1926]』参照)、デカルコマニー (décalcomanie) でできた絵具の複雑な様態を見て、いろいろな絵画的ヴィジョンを獲得すること等は、すべて見立てが基盤となった内容である。

上記のように、見立てはさまざまな造形活動において観察できる。造形遊びの場合でも、見立ては重要な活動原理である。この働きを軸として、時に予測不可能な活動が展開していくこともある。

参考1. 床に敷いた模造紙に絵具を撒いたり塗りあげたりして、そのとき偶然できた線・形から自由に発想して絵画表現を展開する。絵具を使った造形遊びに関しては、前述9.の活動参照。

山本文彦は、油彩画製作の最初の下塗り段階で、想像活動を活性化するための面白い形を得るために、パレットナイフで絵具を無作為に塗り、画面が乾燥する前にさらに溶き油を垂らすという作業を設定している。彼は絵具による下地づくりについて次のように述べている。「この時、何を描こうかと考え、形を意識してしまうと下地づくりの色や形も無意識に制限されてしまうので、いわゆる“無の境地”でやるのが望ましい。」こうした取り組みは、上述の活動展開において参考になる。

*『月刊アトリエ [特集]CREATORS IN JAPAN: 裸婦を埋めつくす鉱物質のマチエール—山本文彦』1987年9月号(no.727、アトリエ出版社)p.49.

参考2. 石をなにかに見立てる活動 (石の絵つけ、装飾等)。川原等でなにかに似ている石を採集し、その場であるいは教室にもち帰って、形態の特徴、大きさ、表面の凹凸状態や質感等を効果的に利用しながら、石に絵具を塗ってなにかを製作する。高橋孝男先生 (新潟県見付市教育委員会指導課 [昭和57年当時]) が、「工作的表現(1) どうぶつえん」(前掲『造形美術教育大系2 小学校低学年編』) で紹介されている、「石のどうぶつ (第1学年)p.121.」参照。また、装飾用材料として木の葉や草花を用い、これらを接着剤で石に接着して、鳥や動物を表現するという、林倫子先生 (大宮市立片柳中学校 [昭和55年当時]) による指導実践例、「この石何に見えるかな—裏庭 (第2学年)」(福田編著前掲書所収、pp.114-115.)参照。林先生は造形活動における見立ての重要性について次のように述べている。「子どもは自分たちの生活や遊び

の中で、子どもをとりまく周辺の物体を何かに見立てる名人である。その何かに見立てる力が広がれば広がるほど、子どもの造形活動の基になる発想の世界も広がる(p.114.)」

参考3. 多種多様な材料を準備し、それらの形・色・材質等の諸点に注目し自由に発想して、6.で述べたコラージュ、アサンブラージュを主体に好きなものを製作する。湯川重明先生(神奈川県藤沢市立鶴南小学校 [平成2年当時])は、諸材料を使つてのコラージュ等ではなく、白ボール紙を使った切り紙絵の展開(5.の活動参照)を主軸とする壁画製作の指導実践例、「思いのままに色や形を楽しもう—色と形の自由壁画(第3学年)」(『教育美術 [特集] 子どもが生きる「図工」の授業』1990年4月号 [vol.51 no.4、財団法人教育美術振興会] 所収、p.34.)を紹介されている。この活動は、自由な切り紙作業を通してさまざまな形を体験し想像を飛翔させ、さらに切った紙に絵具で色・模様を施し、できた作品を壁に貼り自由に並べ替えながら壁画製作を行うというものである。湯川先生は、この活動の趣旨について、「写実的な、主題のはっきりしている絵を描かせるのではなく、無意識に無目的にできてしまう形、色を徹底的に楽しませることを考えた(p.34.)」と記している。

参考4. 顔見つけ遊び。学校、家、家の近所等で顔に似たものを捜してスケッチし、最後に顔の作品集を編集・製作する。顔は最も見立てられやすい対象の1つである。鑑賞用教材として、ジュゼッペ・アルチンボルド(Arcimboldo, Giuseppe)の、「動植物、魚、器具などの組合せのみによる静物画にして肖像画、かつ寓意画でもある二重映像の奇想にみちた作品*」参照。この活動を諸材料を使つての仮面製作等に発展させても面白い。

*前掲秋山他編集『新潮世界美術辞典』p.61.

参考5. 影をなにかに見立てる活動。高田利明先生(山口大学教育学部附属光小学校)は、鉢植え、風速計を初め、理科準備室の各種器具等、児童が興味を覚えて選んだものの影の形をケント紙に写し取り、それを基に画面を構成してTPフレームを製作し、OHPでスクリーンに投影し影絵遊びを展開するという、造形遊びの授業に取り組みされている(高田利明「影を集めてつくる影絵(第5学年)」[『形 forme 第203号 [特集] 影絵・ステンドグラス』所収、1990年]pp.4-7.、および、高田先生による本活動の学習指導案[『第76回初等教育研究発表大会要項』所収、山口大学教育学部附属光小学校、1991年]pp.34-35.参照)。影の見立てを主題に置くこの種の活動に関しては、福田編著前掲書所収の、相場由紀子先生(神奈川県川崎市立生田小学校 [昭和55年当時])による2つの指導実践例、「影で遊ぼう—屋上(第1学年)pp.142-143.」、「影絵遊び—教室(第2学年)pp.145-146.」もあわせて参照願いたい。

参考6. 廃材彫刻の展開(前述した6.、7.の活動参照)。加藤伴江先生(徳島県徳島市立八万南小学校 [平成2年当時])は、材料からの発想に重点を置く、廃材を使つての造形遊びの指導実践例、「廃材でつくる造形あそび(第3学年)」(『美育文化』1990年1月号[vol.40 no.1、財団法人美育文化協会] 所収、pp.50-51.)を紹介されている。加藤先生は、導入時に設定した発想遊びで、児童が梨のパッケージを見て、鰐の背中、亀の甲羅、大仏の頭のようにと答えたことを記している。発想遊びを土台に、材料の諸性質を生かした造形活動が多様に展開するが、製作段階では、中学年の材料体験・技能面の発達を踏まえ、接着・接合や切り開き・切り起こし等の基本的な成形技法に関する指導を位置づけている。動物、ロボット、建物等が主たる表現主題である。

見立てを基本にユニークな彫刻群を製作したのは、前述7.でも触れたピカソである。彼の廃材彫刻は、身近に見つけた品物を大胆に利用するという、塑造・石彫等における伝統的彫刻観を逸脱した材料に関する価値観と、材料がもつ形態的・構造的な特徴から作品を柔軟に発想する見

立ての手法の、双方に特質がある。『牡牛の頭部(1943)』は、自転車のサドルを顔に、ハンドルを2本の角に見立て、2つを接合しただけというシンプルな表現である。また、『猿の母子像(1952)』の母猿の顔・頭部には、玩具の自動車を使っている。こうした発想・表現手法は造形遊びと密接に関連するものである。

食卓にパンを置き、グローブのような手に見せておどける、ピカソの著名な写真がある。彼の遊び心に満ちた見立て的着眼は、後述する16. の活動とも関連してくる。上記写真は、筆者にとり、旺盛な想像力と自由な発想で作品を製作し続けた、ピカソの作家的姿勢の原点のように思えてくる。彼の仕事を特徴づける見立ては、材料からいろいろに発想を拡げ造形活動を幅広く展開する、造形遊びの重要な基盤である。

参考7. ごっこ遊びの展開(次の15.の活動参照)。ごっこ遊びを見立ての観点から捉える必要がある。ままごと遊びでの葉っぱの皿や、そこに盛りつけられる草・小石・泥ダンゴ等の食べ物、また、電車ごっこでの縄・段ボール箱等の車輛等、一般にごっこ遊びの材料は、本来の意味・機能を離れて別のものに変えられている点に特徴がある。造形遊びで段ボール箱が部屋・建物・乗り物等に変身するのは見立ての働きによる(2.の活動および4.の活動の参考2.参照)。辻田嘉邦・板良敷敏・岩崎由紀夫・今西榮共著『造形遊び—指導と展開のポイント』(図画工作ポイントシリーズ、日本文教出版、1982年)に掲載の、新聞紙を丸めて繫ぎホースを製作して遊ぶという指導実践例、「消防ごっこ(第2学年)pp.60-61.」参照。

15. 材料・製作物で遊ぶ活動

point:材料自体および材料で製作したのを使って遊ぶ活動。この活動は素朴ながら造形遊びの根幹であり、近年、都市部で著しい減少傾向を見せる外遊びがその雛型である。かつて子供達は遊び場で見つけたさまざまなものを利用して活動を展開し楽しんだ。そこには豊かな材料体験と造形面での数多くの発想・試行錯誤・問題解決があった。

参考1. 塾通い等で遊ぶ時間が減少し、また、テレビ、ファミコン等の簡易な娯楽に押され激減してきている、外遊びでのつくる活動の復権を目的とした、紙飛行機、凧、コマ、パチンコ、紙鉄砲、弓矢、けん玉、輪投げ、竹トンボ、竹馬等を製作して遊ぶ活動の展開(製作の方法・手順等に関しては、教師の指導が必要)。造形遊びを推進する山口県岩国市立麻里布小学校では、第4学年を対象に、豊富に用意した枝木を道具・補助材を使って裁断・接合しながら、パチンコ、弓矢、ブランコ、縄で棒の両端を縛った縄跳び用遊具、木をヒモでぶら下げた一種の装飾具等を製作して遊ぶ活動が行われた(指導者:道城佐規子先生。授業実践を収録したビデオ「木〔枝〕で遊ぶ[1990年]」参照)。この種の活動に関しては、福田編著前掲書所収の、高浦浩先生(東京学芸大学附属小金井小学校[昭和55年当時、現在鳥取大学])による2つの指導実践例、「飛んだ、飛んだぞグライダー—教室・校庭(第4学年)pp.168-169.」と「自作のおもちゃのおたのしみ会—校庭(第6学年)pp.186-187.」、および、小関武明先生(東京都港区立南山小学校[昭和57年当時])による指導実践例、「円盤投げ遊び(第4学年)」(『造形美術教育大系3 小学校中学年編』[美術出版社、1982年]所収、pp.106-107.)参照。

参考2. さまざまな音がする各種廃材を利用して音具・簡易楽器を製作し、それらを実際に演奏し、最終的に演奏曲目を全員で話し合っ合奏活動を展開する。「きょうは、君たちみんなが発明家だ。持ってきたいろいろな材料で、ひとつ、新発明の楽器をつくってごらん。楽器が

できたら、みんなで大演奏会をしよう」という教師の呼びかけで始まる、高浦先生による指導実践例、「楽しい演奏会—教室（第3学年）」（福田編著前掲書所収、pp.156-157.）参照。弘中順一先生（山口大学教育学部附属光小学校）は、こうした活動展開に演劇的要素を加味した造形遊びの授業を試みられた（弘中先生による「おと おと なんでしょう—もりのくまさんの音楽劇をしよう [第1学年]」の学習指導案 [前掲『第76回初等教育研究発表大会要項』所収、pp.38-39.]参照）。また、音を聞き、音への興味を高めることに重点を置く指導実践例として、高浦先生による「どんな音が出るかな—校庭（第1学年）」（福田編著前掲書所収、pp.140-141.）や、「ふしぎな音づくり（第2学年）」（辻田他共著前掲書所収、pp.70-71.）参照。

音具・簡易楽器製作に関する参考図書には、繁下和雄著『音と楽器をつくる』（子どもとつくる4、大月書店、1983年）、トム・ウォルサー著・絵『きみも音楽家になれる』（福山敦夫訳、子どものためのライフ・スタイル、昌文社、1986年）、安田寛・今村方子・田中照通共著『ガラクタ楽器の世界—子どものための音あそび集』（音楽之友社、1990年）等がある。

16. パフォーマンス的活動

point:表題の「パフォーマンス(performance)」は、「行為」を意味する言葉であり、演劇では演技、音楽では演奏を指す用語である。現代美術動向を背景に70年代より、美術でもこの用語が広く使われた。画家・彫刻家のアトリエでの作品製作といった伝統的活動形態をみだして、作家自身がある表現意図をもって観衆を前にある行為を演じ実践するという、身体表現を中心とした活動（小道具・装置類や衣裳等がしばしば工夫される）を総称して、パフォーマンスと呼ぶ。パフォーマンスの様態には、材料を使って造形活動の過程を見せるもの、テキストの朗読、観衆との対話、ダンス・舞踏的表現、演劇・儀式的表現、歌・演奏等があり、実に多種多様である。

造形遊びでは、材料を補助的・装飾的に使っての身体表現を指す用語として、パフォーマンスを狭義に使用する。パフォーマンスは、『小学校学習指導要領（第7節図画工作、第1・2学年A表現）』にある、「体全体を使う造形遊び(p.86、p.87.)」と関連するが、昭和52年版『小学校学習指導要領（第6節図画工作、第1学年A表現）』では、「自然物や人工の材料の色や形に関心を持ち、それからつくりたいものを思い付いたり、それを身体につけて楽しんだりするなどの造形的な遊びをすること(p.77.)」と、パフォーマンス的活動を具体的に記していた。この活動を前述15.の展開として見ることができる。パフォーマンス的要素を備えるちゃんばらごっこを最近見かけないが、筆者は、子どもが首にバスタオルを巻きアンパンマンになって遊ぶのを見たことがある。この種の遊びがパフォーマンス的活動の原点である。

参考1. 全身的活動を重視したパフォーマンス的活動の展開。新聞紙、包装紙、広告、色紙、和紙等、各種の紙をハサミでテープ状に切って紙テープの束を製作し、その束をヒモを補助材にして体につけ運動場を走ってなびかせるという、板良敷先生による指導実践例、「紙テープをつけて走ろう—教室・運動場（第1学年）」（福田編著前掲書所収、pp.134-135.）参照。また、折り曲げた段ボール紙にボール紙を接着し、さらにパスで模様を描き、包装紙、セロハン紙、アルミ箔等を接着して、孔雀の羽を製作し、それをもって開いたり閉じたりしながら運動場を動き回るといふ指導実践例、「くじゃくになろう（第1学年）」（辻田他共著前掲書所収、pp.36-37.）参照。

参考2. 変身・仮装の活動。米袋等を使って動物を製作し、これをかぶって動物ごっこを楽しむという、模倣遊びを重視した指導実践例、「動物にヘンシン（第1学年）」（辻田他共著前掲書所収、pp.36-37.）や、新聞紙、色紙、画用紙で製作したシッポ、ヒゲ、耳を身につけて、シッポ踏みゲームを展開するという、相場先生による1学年・4学年合同の授業実践、「どうぶつ村は大さわぎ—教室・校庭（第1・4学年）」（福田編著前掲書所収、pp.154-155.）参照。相場先生は上記活動に関して次のように述べている。「動物が大好きな子どもにとって、その超能力はうらやましい限りである。そして、動物の動きを模倣したり、角やひげを身につけたりすると、またたくまに自分も動物に変身してしまう（p.154.）」変身・仮装の活動に関しては、前述8.の参考2.も参照願いたい。また、パット・オレスコ(Oleszko,Pat)の言葉遊びを交え諷刺的の主題が楽しめる仮装パフォーマンスの展開や、萩本欽一の全日本仮装大賞のTV番組等参照。

この種の活動の発展型として演劇的展開が考えられる。岡田薫（元東京学芸大学附属世田谷小学校）は、仮装を演劇表現に応用した。児童劇『ピッピ みのみのしまへ（昭和62年度劇の会、1年3組）』で、本来、舞台装置・背景として設定される種々なもの——波、椰子の木、花、太陽、焚火の薪、鷗等を、児童が製作し仮装して演じた。劇が終了し、出演者全員が退場すると、舞台には箱台と1脚の机だけが残された。この児童劇はエコロジー・自然愛護を主題としており、前述13.の活動とも密接に関連する（佐々木薫「演劇教育の手法を導入した造形教育の実践的研究」〔『大学美術教育学会誌 第21号』所収、大学美術教育学会、1989年pp.117-126.参照）。

参考3. 仮装の写真表現への展開。仮装用具と撮影用舞台セットを製作し、仮装した児童がこのセットのなかでポーズを取り、照明効果を工夫し、友達・教師が写真撮影する。後で教室・廊下の壁に全員の写真を展示する。この種の活動に関しては、物語・映画等の1場面を想起させる場面設定でセルフ・ポートレートを撮り続けている、シンディ・シャーマン (Sherman,Cindy)の仕事や、美術史で馴染みが深い絵画、彫刻、写真等に自身を登場させるという、ユニークな写真活動を展開している、森村泰昌の仕事等が参考になる。また、仲間達とポーズを取り合うパフォーマンスの場面を画面に導入し、個性的な絵画表現を追求している、スティーヴン・キャンベル(Campbell,Steven)の仕事も注目に値する。

参考4. パフォーマンス的活動を、詩・作文の朗読会や、前述した音具・簡易楽器を使った創作音楽演奏会等に取り入れ、総合的・多角的な表現活動を展開する。水島尚喜先生（現在山形大学）が、東京学芸大学附属竹早小学校で取り組まれた授業実践、音具・簡易楽器、図形楽譜、絵画、スライド等、多数の表現メディアを組み合わせた創作発表会の活動、「音と映像による表現（第5学年）」参照。この活動は次の17.で示す活動類型にも属する。『美育文化 [特集] 音・子ども・造形』1989年11月号 [vol.39 no.11、財団法人美育文化協会] 所収の、水島先生の小論「造形教育における「音」をめぐる（pp.12-17.）」もあわせて参照願いたい。

17. マルチメディア的活動

マルチメディア(multimedia)的活動とは、多様な表現メディアを動員し、光、電気、各種動力源等も利用した、総合的で相互横断的インタラクティブな表現活動の総称である。現在、この活動に関しては未整理であり、以下に5種類の活動類型を設け説明するが、内容の再検討・改善が必要である。

1)太陽光、OHP、照明器具等を利用した、光を使った表現活動。校庭で銀紙(60×50cm)を

使って風景を映したり光を反射させたりして遊ぶという指導実践例、「ピカリッチ（第6学年）」（辻田他共著前掲書所収、pp.102-103.）や、同書 p.16.掲載のOHPを使った表現活動参照。前述した14.の活動の参考5.も参照願いたい。また、前田ちま子氏が、「子どもの城造形スタジオと造形あそび」（『美育文化 [特集] 発展する造形あそび』1989年9月号 [vol.39 no.9, 財団法人美育文化協会] 所収、pp.16-20.）で紹介されている、“光と造形”（『子どもの城』企画）での2つの活動実践、①鏡面紙、トレーシングペーパー、セロハン紙で製作したチューブを通して光を見る活動、②影を数秒間定着できる蓄光シートに影を映して遊ぶ活動参照。作家の活動としては、モーターで動くオブジェ類を照明装置が背後から照らし、走馬燈に似た影絵的效果を生み出す、ジョン・ケスラー(Kessler,Jon)の壁に設置されるレリーフ・コンストラクション参照。

2)カメラ、スライド、ビデオ、パソコン等を使った、写真・映像表現の展開。前述16.の活動の参考3.や水島先生の授業実践（参考4.）参照。スライドを舞台背景に効果的に使う、ローリー・アンダースン(Anderson,Laurie)のパフォーマンス活動や、ビデオ・アートの先駆的業績を残し、パフォーマンス、インスタレーションと結合したビデオ表現の新展開を図る、ナム・ジュン・パイク(Paik,Nam-June)の活動参照。学校教育現場に普及してきたパソコンも、造形遊びにとって可能性ある表現メディアに成熟するものと思われる。

3)風力、水力等の自然の力、ゴム、ゼンマイ、モーター、電磁気、機械等の動力源、コンピュータ制御等による、キネティック・アート(Kinetic Art: 動く芸術)的な活動。自然の力に着眼した造形活動には、アレクサンダー・カルダー(Calder,Alexander)の古典的なモビールや、新宮晋の風力、水力で動く彫刻作品等がある。この種の活動はエコロジカルな観点から評価でき、前述13.の活動と関連する。ジャン・ティンゲリー(Tinguely,Jean)、デニス・オッペンハイム(Oppenheim,Dennis)、アリス・エイコック(Aycock,Alice)等は、機械・電気じかけで動く作品を製作している。

4)音にアプローチした造形活動。この活動では次の3種を取り上げる。①音具、簡易楽器、音響彫刻等の製作と、それらを用いてのパフォーマンス・演奏活動、②種々な材料を配置構成するサウンド・インスタレーション、③マイク、多重録音装置、再生用オーディオ機器、エレクトリック・ギター、エフェクター類、シンセサイザー等、各種電気・電子機器を駆使した、音・音楽と連携した表現活動。前田氏が前掲活動報告で紹介されている、“音と造形”（『子どもの城』企画）での音具を使って音体験を広げる活動参照。この種の活動に関しては、音自体の直接体験から音楽学習を構築しようと試みる、創造的音楽学習のような音楽科の実践が参考になる（水島前掲論文参照）。音の既成概念を碎き新鮮な感動をもたらす、鈴木昭男のパフォーマンス活動、音と彫刻の関係を追求する、増田感の音響木彫、身近な品物で音の場を構築する、松村要二のサウンド・インスタレーション等参照。

5)多くの表現要素を総合的に組み入れた活動。この種の活動を試みる作家には、全表現領域を網羅するような諸活動を、パフォーマンスを軸に連結し統合する、前記ローリー・アンダースン（岡田匡史「ローリー・アンダースンの着眼点の考察」[『美術教育学—美術科教育学会誌 第8号』所収、美術科教育学会、1986年] pp.5-16.参照）、環境音楽を創始し、最近では音楽と絵画の中間的・境界的領域で映像・インスタレーションの仕事を行う、ブライアン・イーノ(Eno,Brian)、実験的な演劇活動を展開する、ロバート・ウィルソン(Wilson,Robert)やピナ・バウシュ(Bausch,Pina)、雑多な表現物を大規模にインスタレートする、ジョナサン・ボロフスキー(Borofsky,Jonathan)、白く塗装したアサンブラージュ風の構築物に、TVブラウン管を

照明源に使う色光を当て、さらに照明用に編集したビデオ映像と同期した音楽を流すという、手の込んだ表現を試みる、吉原悠博等がいる。こう列挙したが、表現様態を系統的に整理するのは困難である。この種の展開は造形遊びではまだ難しいが、今後、予期せぬ数々の活動が、諸種の表現メディアへの意欲的な働きかけによって生まれてくるものと思われる。

主要参考文献

造形遊びの指導実践例に関しては、下記3著、2誌を重点的に参照し、掲載の指導実践例多数を引用・紹介した。造形遊びに積極的に取り組まれ、御繁忙にもかかわらず現場での授業実践を御報告され、貴重な勉強の場を与えてくださいました各先生方に、この誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

*古市憲一著『造形あそび』（グリーンブックス、開隆堂、1979年）

*福井昭男編著『造形遊び—その指導と展開』（東書TMシリーズ、東京書籍、1979年）

*辻田嘉邦・板良敷敏・岩崎由紀夫・今西榮共著『造形遊び—指導と展開のポイント』（図画工作ポイントシリーズ、日本文教出版、1982年）

*『教育美術』誌（財団法人教育美術振興会）

*『美育文化』誌（財団法人美育文化協会）